

その三 正月（続き）

宫廷の女官たちの位が改まる^{によじよい}女叙位^{おうるく}の式が行われ、貴いお方の子女が絹の布などを賜る女王祿の儀が行われる八日には、そういう方々が、喜び勇んで走らせる車の音が、ひとりわ高く聞こえて面白い。

もち粥のお膳をいただく節供を終えたあと、みんなで、それでお尻を打てば子どもが産まれると言われている、お粥を炊いた木切れを後ろ手に隠し持つて、位の高い女房の御達さまがたがようすを見守るなかを、うつかり打たれたりなどしないよう、それそれが後に気を配つていたりするようすが、なんだかとても面白い。

なのにどうしたことか、お尻を打たれてしまつたりする子がいたりするのが面白く、そんなようすがいかにも絵になつて目をひき、きやあきやあと、大きな声を上げて笑い合つたりもするので、打たれた子が、悔しく思うのは当たり前。

新たに通つて来るようになつた婿君を、宮中にご案内するのが待ち遠しくて、いまかいまかと待つておられる姫君の後を、自分こそが打とうと、一人の女房が何気なくようすを覗き込んだりなどして、そわそわしながら奥の方でひそんでいるのを、その前を通つた人が気付いて思わず笑い、シーツ、そんなに騒がないでよと、そつと言つて制したりするのに、お姫さまの方はそれさえ気付かず、ほんやりおつとりとしておられたりするのも面白い。

そこで女房が、ここにある物をお渡しいたしますね、などと言ひながら走り寄つて後ろを打てば、そこにいた人たちみんなが大笑い。そばにいた男君もつい微笑んだりなどするけれど、姫さまはそれほど驚くようすを見せず、それでも、顔が少しボツと赤くなつたりするのが、とつても可愛い。

そんなふうに、たがいに打ち合いっこをして、なかには、男の方さえも打つたりする人がいたりもするのは、一体、どういうおつもりでしよう。かとおもえれば、打たれて泣き出したり、腹を立てて人に恨み言を言つたりする人がいたりするのも面白い。いつもはちゃんとしていなくてはならない貴い宮中だけれども、今日ばかりは、堅苦しいことはなしにして、みんなで乱れて大騒ぎ。

また正月には、新たにお役目が任じられる除目^{じもく}も行われ、そのときの宮中の内裏のようすも、これまた大変面白い。雪が降つて、水が凍つたりするような寒い日に、就かせてもらいたいお役目をお願いしようと、あらかじめしたためてきた申文^{もうしふみ}を持って、四位や五位の、心持ちのしつかりした若い方が、急ぎ歩くようすなども、なんだか妙に頼もしくて、なんだか爽やか。

でも、老いて白髪頭になつた方までもが、誰かに口をきいてもらつて、宮中にお部屋を持つ女房の◆局^{ほね}のところに行き、自分がどれだけ賢くてどんな役にたつかなどを、一生懸命に話したりもする。けれど、そんなようすをまねて、おつきの若い◆女子^{おなこ}たちが影で笑いながらからかっていることなど、老人は知るはずもなくて、くれぐれも陛下によろしく申しあげて下され、皇太子さまにも、どうぞよろしくお伝えください、などと一生懸命に言つておられる。それが功を奏して、良い役職を得られればいいけれど、もしそうならなかつたら、なんと哀れなことでしょう。